

3 館跡の構造と性格

室野秀文氏によれば、花沢館は構造上、山頂の主郭部分と、前面部に分けて考えることができ、後背部の尾根筋を堀切で区切り、前面には二段の腰曲輪と細い小さな空堀を配し、背後の堀切は東西両側斜面に延びて主郭部を囲郭するという。『続上ノ国村史』所載の花沢館跡復原図に、斜面下の池（湧水）を渡り、斜面を曲折して登る道が記されており、長い腰曲輪の最も下の段の西端にある大手虎口に到達している通路を読み取り、この通路跡は現在でも断続的に確認できることから、大手に向かう通路は、現在の北西側張り出し部の山道ではなく、東側の張り出し部の斜面からであったとした。大手の虎口は現状でも平場を切り込んだ様な低みとなってよく残されており、北西側の張り出しから強力な横矢（側射）が掛かる位置関係になっていて、自然の起伏を巧みに取り入れたプランであるという。

また、館後方の空壕外側の土塁状の高まりの切断箇所を通過して、空壕に降りて若干西側に回り込みながら、主郭に至る通路を確認し、頂上部に上り切るところは切り込まれているので、搦め手の虎口であったと考えられている⁽⁴⁰⁾。

全体的に大型の建物がたつ大きな平坦面は少なく、頂上部は柱穴が確認されただけであり、かつ段の多さなど他の館と比べても形状的にも差異がある。

出土遺物の珠洲のすり鉢（吉岡編年Ⅴ～Ⅵ期）や中国竜泉窯系青磁碗、切高台の白磁皿などは15世紀の中葉から後葉にかけての年代を示している。

出土遺物の分析と文献史料との照合から、花沢館は安藤政季によって守護の置かれたとされる下国茂別館や松前大館のような、広大な郭と城域をもつ守護所とは構造を異にする山城であり、存続年代は、コシャマインの戦い前後、15世紀中葉から館主の蠣崎季繁が没する寛正3年(1462)頃まで、すなわち1450年前後から1460年代、かりに年代が下がっても15世紀後半までの数十年間と考えられ、居住空間をもたないきわめて短期間の臨時的な詰城（砦）と判断するに至った。『新羅之記録』が堅固に守って陥落することがなかったとした花沢館と、現在得られている考古学的な知見とはなお隔たりがある。

第2節 洲崎館跡

1 沿革

『新羅之記録』は、長禄2年(1458)花沢の館主蠣崎季繁が安藤政季の息女を養女とし、コシャマインとの戦いに戦功あった武田信廣に嫁がせ、上国河北天河の「洲崎」の館に居いて家督と仰いだと書く。ただし、松前藩の正史ともされる『福山秘府』は始祖信廣「壘を築く」とする。

寛政元年(1789)に洲崎の旧跡を訪れた菅江真澄が「かいわけてメナの村にいづ。こゝなんむかしは、勝山の花見が館より此処に閑居の館をいとなみて、そのころすませ給ふたるむかしがたりをせり。本館より北にあたればとて、今も北村とはいへり。」(『蝦夷喧辞弁』)と書き留めた。この「閑居の館」が洲崎の館のことと考えられるが、この間、「洲崎」という地名は掻き消えたかのように記録には見えない。

昭和36年、砂館神社の南西、町道向浜線沿い砂丘の下部から、開元通宝や永楽通宝を含む銅銭約2,500枚が採集され、青磁・白磁なども出土した。同54年には神社東方120mほどの砂丘上の畑地から珠洲Ⅴ～Ⅵ期と思われるすり鉢を被った人頭骨が発見されている⁽⁴¹⁾。

同58年には神社南西の町道向浜線沿いの砂取場から大量の陶磁器と擦文土器が採集され、平成5年には館跡東方の国道228号沿いの住宅建築に伴って掘立柱建物の柱跡を確認し、15世紀頃と推される青磁一片を採集している。

2 調査の経緯と結果【第17・18・19図参照】

館の規模や構造（縄張り）把握のため平成11～13年の3ヶ年に亘って、トレンチ方式で詳細分布調査を行った。調査箇所は砂館神社境内地を中心に、周辺の砂丘上や東南の平坦部など合わせて69ヶ所に及んだ。

1) 平成11～12年度調査

『新羅之記録』に洲崎館の北側に毘沙門堂が作られたとの記述があるので、遺構を検出すべく、建立位置と目される砂館神社本殿北側の砂丘上（第32～37調査区）を調査したが、中世の遺物はおろか、近世

の遺物も検出されなかった。

館内部と予想していた神社東側（第5～8調査区）では、中世陶磁は珠洲すり鉢片1点のみで、近世近代の陶磁器ばかりであった。

第1～2調査区は、視認されていた土塁状遺構の構築時期を確認する目的で調査を行ったが、土層堆積をみると人為的に構築された痕跡はなく、むしろ風性砂の自然堆積と考えられている。

神社西側の砂丘上（第20～30調査区）に遺構は確認できなかったが、青磁・白磁の碗や皿、珠洲すり鉢、石臼などの中世遺物を確認している。

境内地入口東側の平坦部（第50調査区）では、青磁、珠洲すり鉢、古瀬戸の陶磁器などのほか、竪穴建物跡や柱穴、土壌、焼土などの中世の遺構を確認し、併せて擦文期の遺物・遺構を検出している。

参道入口付近の旧目名川跡地に面する畑地や平坦部（第52、55～57調査区）では、中世の遺物や遺構のほか、擦文時代の土壌や土器、同時期の土師器坏、五所川原産の須恵器なども検出している。

2) 平成13年度調査

第50調査区（参道入口東側平坦部）を拡張して第64調査区を設定し、調査した結果、擦文期から近世の土層面で多数の遺物・遺構を確認した。

擦文時代では竪穴建物跡、擦文土器等を確認し、中世は2期に分かれ、柱穴や竪穴建物跡、土壌や焼土のほか青磁・白磁の碗や皿、珠洲すり鉢、瀬戸皿など、近世では柱穴、肥前系の碗と皿を確認している。

中世の遺構は竪穴建物跡が2棟、墳底部に敷石を持ち、径が7～8寸ほどの大型の柱穴が5基検出され、大型の掘立柱建物跡が想定されたが、調査区外の町道向浜線側へ伸びるようである。

東隣の第65調査区と旧目名川跡地沿いの第66調査区では、攪乱によって遺構は捕捉できなかったが、擦文から近世までの遺物を検出した。

館跡に関連する遺物では、青磁、白磁、青花（染付）等の舶載磁器や瀬戸の皿、珠洲のすり鉢等が約400点ほど出土している。その範囲は、砂館神社西側の砂丘上や境内地、参道入口東側の一角を中心に、西は向浜の川裾神社（旧称向浜明神堂）参道付近から、東は旧目名川跡地と町道向浜線、町道上ノ国北村線に囲まれた三角地の一隅まで延びている。

出土陶磁器の構成をみると、中世陶磁器の約8割を貿易陶磁が占め、食膳具の碗は舶載の青磁、皿は同じく舶載の白磁と使い分けがされているようで、調理具・貯蔵具はほぼ国産陶磁器で、すり鉢と甕は珠洲のみである。鉄製品のほとんどが生活用具や建築用具類で、武具は刀子のみで軍事的要素は乏しいとする。

3 館跡の構造と性格

この館跡の指定範囲は、海浜地にほぼ並行して北西に走り、最高標高15mほどの二つの砂丘列を中央に、東は国道228号沿い西側に並ぶ住宅地の後背地、北は商業地で限られ、南は旧目名川跡地に沿って走る町道向浜線によって画されている。

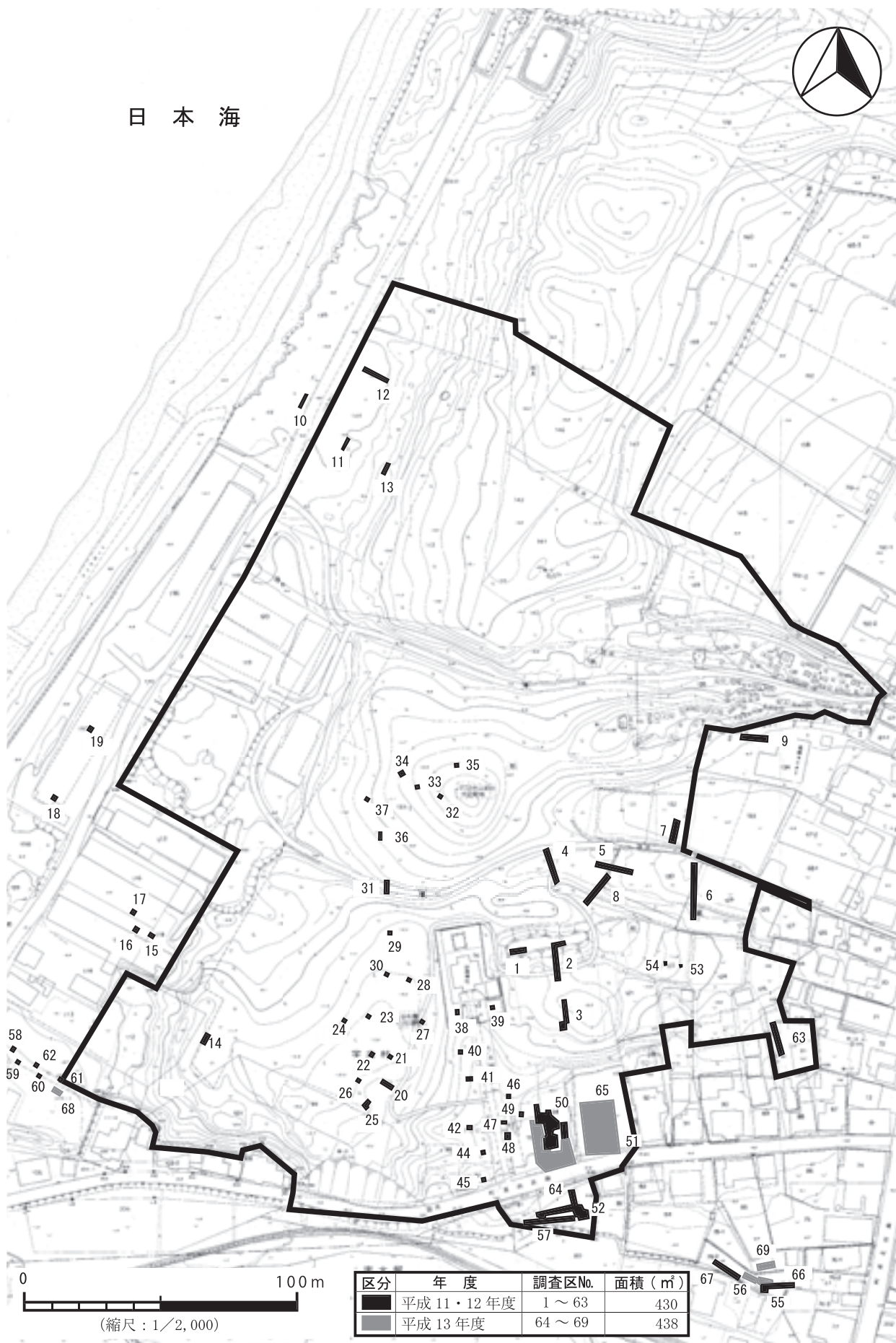
洲崎館跡内外の調査によって明らかになった遺構・遺物は、砂館神社より南側の砂丘上や低地で確認されており、現在の指定範囲を越えて、旧目名川跡地に沿うように東西に拡がりをみせている。

中世の生活空間は、すり鉢被りの人骨が発見された神社の東方から、向浜地区の分布調査で白磁が出土した川裾神社（旧称向浜明神堂）付近までと捉えられ、館の中核は、参道入口東隣付近を中心に、神社西側の砂丘から町道上ノ国北村線の旧目名川跡地付近に及ぶ範囲であったと考えられている。

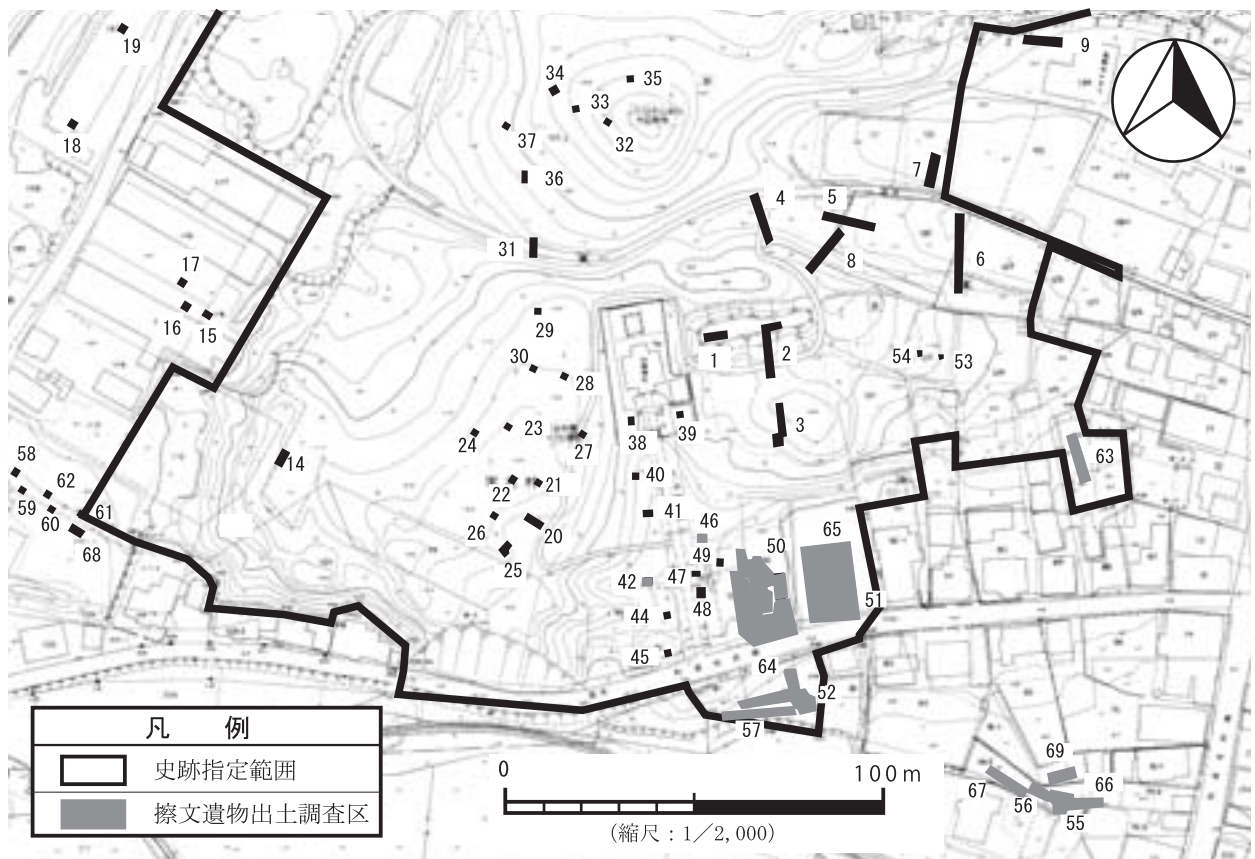
出土遺物の構成は、15世紀中半から後半にかけての陶磁器が圧倒的に多数を占め、青花などの16世紀代の遺物は数えるほどしかないので、洲崎館跡の終末年代は、光廣・良廣父子が上ノ国より大館に移住した永正11年（1514）には遅くともその役割を終えていたものと考えられる。

なお、参道入口付近、船着き場が想定された旧目名川跡地に面する畑地で、吉岡編年第IV期と比定しうる珠洲すり鉢片や古瀬戸平碗などを検出しているので、先行的な居住や土地利用が14世紀代から考えられる。

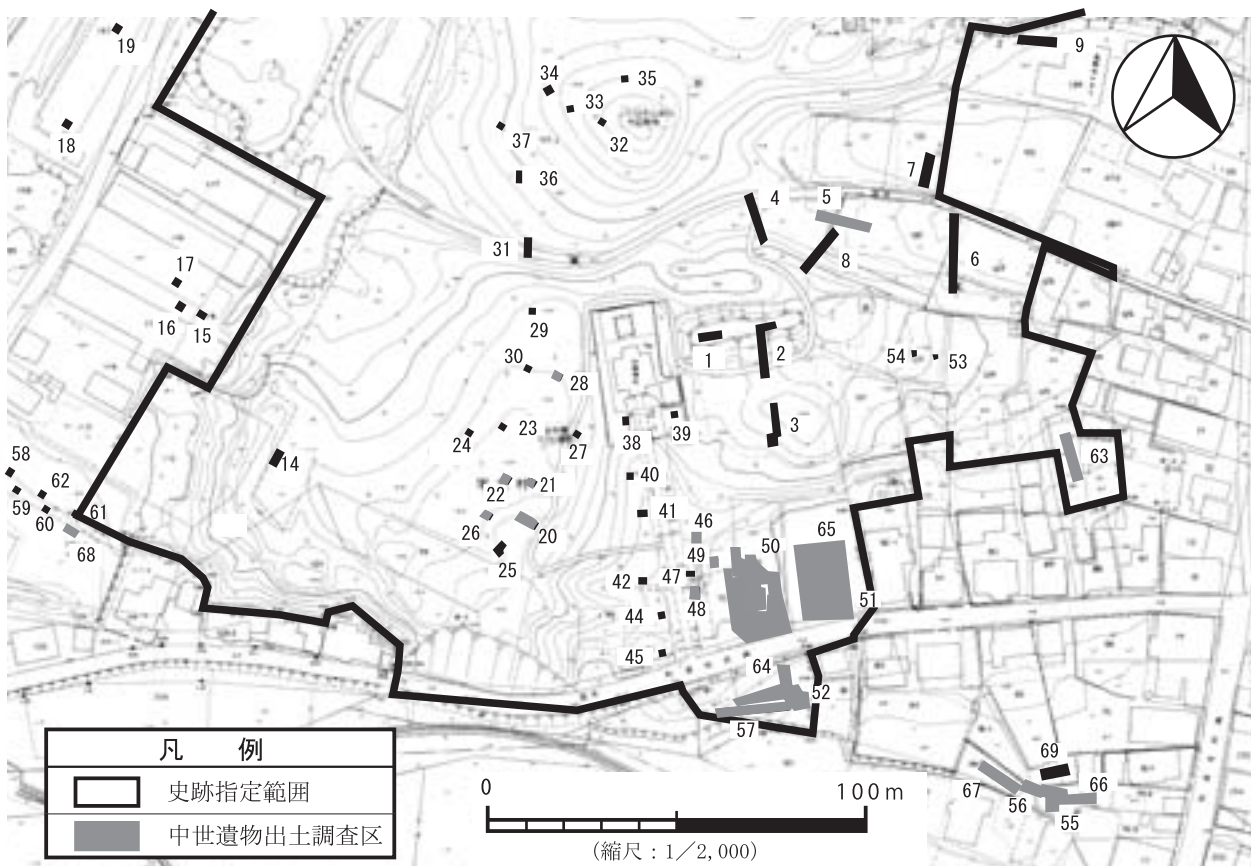
また、参道入口東隣の擦文期の竪穴建物跡を中心に、10世紀中葉から後半にかけての擦文土器が土師器



第17図 史跡上之国館跡（洲崎館跡） 調査区位置図



第18図 史跡上之国館跡（洲崎館跡） 時期別遺物分布図 1



第19図 史跡上之国館跡（洲崎館跡） 時期別遺物分布図 2